

第2章 幼稚部

I 結果と考察

1. 回答者となった教員の属性

回答の分析から、回答者となった教員は144名と考えられる。

1) 回答者の年齢構成

回答者の年齢構成を表2-1に示した。その中央値は43.0歳であった（24-67歳）。40歳台がもっとも多く、次いで、30歳台と50歳台、20歳台、60歳台の順に多かった。

表2-1 回答者の年齢構成

年齢段階	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台	無回答	計
人数	21	35	50	30	7	1	144

2) 聴覚障害児に対する指導歴

教員歴および聴覚障害児に対する指導歴の構成を表2-2に示した。教員歴の中央値は17.0年であり（3-41年）、聴覚障害児に対する指導歴の中央値は8.0年（0-38年）であった。

次に、聴覚障害児に対する指導歴について表2-3に示した。特別支援学級（難聴）および通級指導教室（難聴）における聴覚障害児に対する指導歴よりも、特別支援学校（聴覚障害）における指導歴の方が長かった。

表2-2 回答者の指導歴（人数）

年数	～5年	6年～10年	11年～15年	16年～20年	21年～25年	26年～30年	31年～	無回答	計	中央値 (Min-Max)
教員歴	15	24	22	22	21	23	17	1	144	17.0 (3-41)
聴覚障害児に対する指導歴	44	35	22	24	5	8	3	3	144	8.0 (0-38)

表2-3 回答者の聴覚障害児に対する指導歴（年数）

聴覚障害児に対する指導状況	中央値	(Min-Max)
特別支援学校（聴覚障害）	7.5	(0-38)
特別支援学校（聴覚障害以外の障害種）	2.5	(0-38)
特別支援学級（難聴）／通級指導教室（難聴）	0.0	(0-6)
通常学級	0.0	(0-34)

3) 医療機関との連携

①医療機関との連携の有無

医療連携があると回答したのは81.9%、連携がないとの回答は17.4%であった。

②医療機関との連携の内容

連携に関して具体的な記述は118人からあり、記述内容は連携の内容と方法に関するものが合計233あった。これらを分析した結果を図2-1に示す。「情報共有・情報交換」との回答がもっとも多く、学校での活動時の様子、聴力測定等の結果を医療機関に伝えたり、病院での検査結果等が学校に伝えられたりしていた。なお、「診察時に病院に同行し、マッピングやST指導場面の参観」するという回答は、「全ケースではない」という回答を含めている。

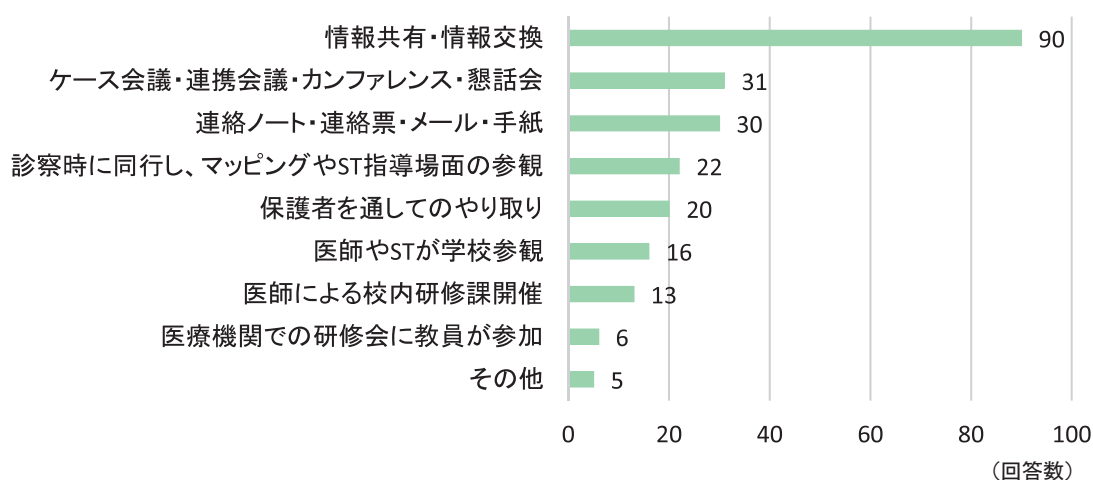


図2-1 医療連携の内容および方法

4) 人工内耳装用幼児の指導

①補聴器装用幼児と比べた指導上の課題

記述内容172件についての分類結果を図2-2に示した。回答の中で多かったものは、「言語発達についての課題」と「特にない、補聴器装用幼児と変わらない」であった。「言語発達についての課題」では、「聞こえているが意味を理解していない」等、言語理解に関する記述が22ともっとも多かった。また、「特にない、補聴器装用幼児と変わらない」では、「補聴器装用幼児と人工内耳装用幼児の違いというよりは、個人の実態によるものが大きいと感じている」、「一緒に遊び、一緒に生活して過ごしているので、人工内耳だから難しいなという感覚は特にない」、「補聴器装用の子供と比べてということではなく、それぞれのお子さんの実態や課題、マッピング状況、保護者のニーズに合わせて指導を行っている」などがあつた。以下、「傾聴態度」、「装用習慣、安全配慮」、「聴覚活用、聴き取りに課題」、「実態把握、評価」、「保護者支援」と大きな差がなく、多岐にわたる内容が記述されていたと言える。「傾聴態度」では、「聴力をよく活用している場合、相手の顔を見て、口元を見て話を聞くという習慣がなかなか身につかない」、「顔を見てやり取りする意識が薄く、傾聴態度が育ちにくい」、「話者をしっかり見て話を聞く態度が弱い」などの記述が複数あつた。「その他」では、医療との連携に関する課題、機器の管理、プール遊び、交流保育等活動による課題等が挙げられていた。

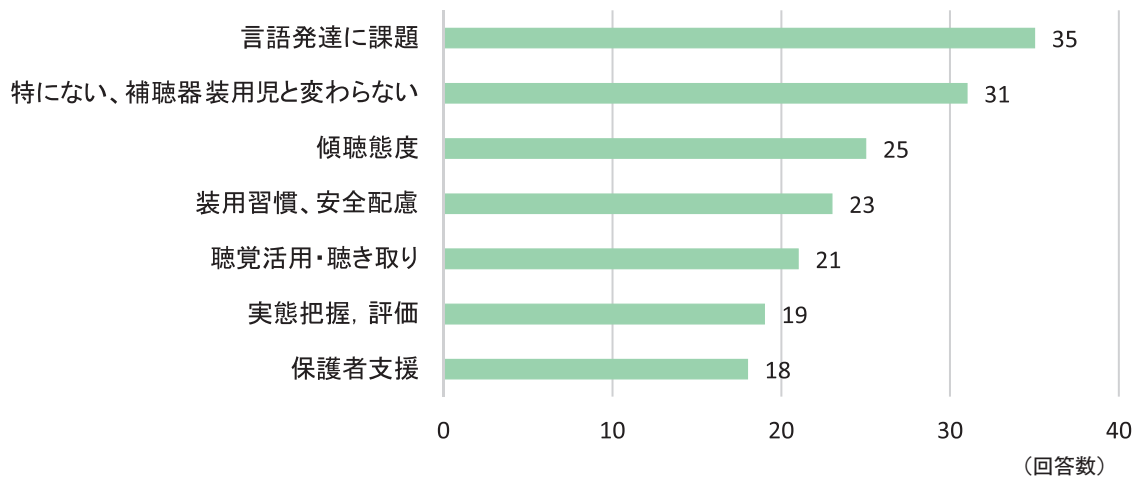


図2-2 指導上の課題

②補聴器装用幼児と比べた指導上の工夫

231件の記述内容の分析結果を図2-3に示した。記述の中で多かったのが、「特にない、補聴器装用幼児と変わらない」、「聴覚活用に重点」だった。「特にない、補聴器装用幼児と変わらない」では、「補聴器装用幼児と同じ指導をしている」、「人工内耳装用幼児にも丁寧な指導が必要である」、「補聴器装用幼児と人工内耳装用幼児の違いというよりは個人の実態によるものが大きいと感じている」、「『人工内耳だから』ではなく『この子だから』という視点で指導している」などがあった。また、「聴覚活用に重点」では、「様々な音に触れる機会を作る」、「音声情報のみをあえて提示する場面をつくる」、「聴覚活用をできるように音声のみで話しかける」、「視覚的教材を適度に活用しながら、様々な音や音声を注意深く聞くように促している」などがあった。この中では、「音声のみ」を聴かせる工夫をしているという記述が複数あった。以下、「話しかけ方に工夫している」、「文字、指文字、キューサイン」、「話し手に注目させる、聞く態度」、「理解の確認、聞き取り状況の把握」、「手話の活用」、「視覚教材・視覚的配慮」となっていた。個々の実態に応じて様々な工夫された指導が展開されていることがうかがえた。

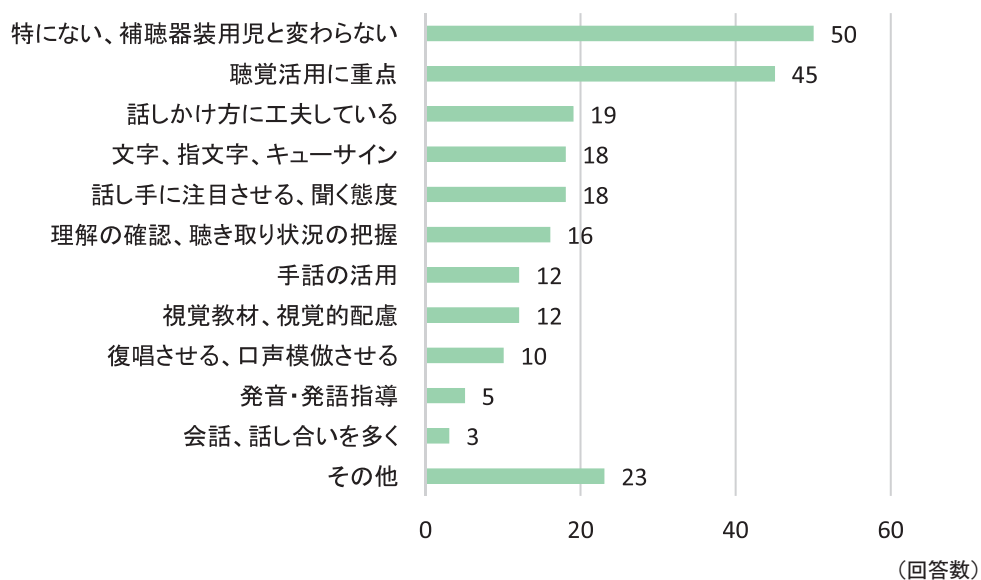


図2-3 指導上の工夫

③補聴器装用幼児と比べた指導上の違い

174件の記述内容の分析結果を図2-4に示した。「聴覚活用が良好、コミュニケーションがしやすい」に関する記述がもっとも多く、次いで「特になし、補聴器装用幼児と変わらない」だった。次いで、「言語発達が良好、言語指導しやすい」、「発音が良好、発音指導しやすい」となっていた。

記述内容としては、「聴覚活用が良好、コミュニケーションがしやすい」は、「離れたところからや視線が合っていないときも、呼びかけることができる」、「人工内耳で低音から高音まで、ある程度フラットに音が入っているという聴こえの状況から、音の届きやすさと聴かせやすさがある」、「音の世界が広がりやすい」、「小さい音まで聞こえるので、音声でコミュニケーションをとることができる。すぐ教師を注視できる」などであった。「特になし、補聴器装用幼児と変わらない」では、「特に意識せず、指導している」、「補聴器装用幼児と比べてというより、個人個人の特性があるので、特になし」、「補聴器だろうが、人工内耳だろうが、それぞれに難しさがあるし、それぞれに良いところがある。(中略)補聴器だからとか人工内耳だからという視点で、幼児の指導を考えていない。『個に応じた』が基本」などである。「言語発達が良好、言語指導しやすい」では、「音声模倣が上手にできる」、「口声模倣を促しやすい」、「言葉や言い回しのバリエーションが広がりやすい」、「自発的に獲得できる言葉や文型が多い」などがあつた。「言語発達が良好、言語指導しやすい」の記述は、「聴覚活用が良好、コミュニケーションがしやすい」に分類した内容と併せての記述が多かった。「その他」では、「絵本の読み聞かせでは、絵と同時に文を楽しむことができている」、「人工内耳は防水機能に優れているため、地域交流保育などでは装用して活動が可能である」、「人工内耳がうまく活用できていない幼児がいる」、「不具合に自分で気付けるので、補聴状態を確認しやすい」などがあつた。

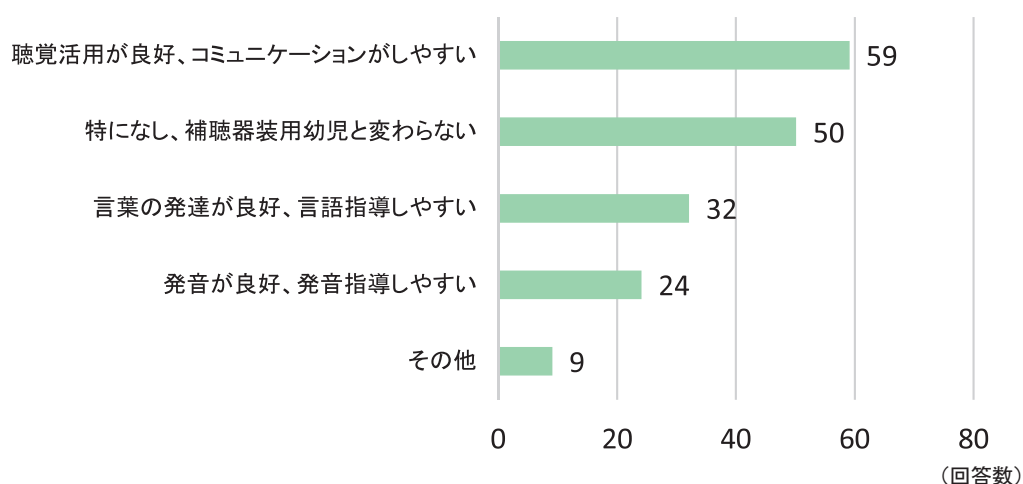


図2-4 指導のしやすさ

5) 人工内耳装用幼児の指導にあたって学習したい研修内容

学習したい研修内容については、198件の記述があつた。記述内容の分類結果を図2-5に示した。「指導方法や学習方法」に関する研修が最も多く、記述内容全体の43件（22%）であつた。また「基礎的研修」が38件（19%）、「関連機関の説明や最新情報」が29件（15%）となつてい

た。この結果を、回答者の聴覚障害児の指導経験年数を「5年以下（40人）」、「6～10年（28人）」、「11年以上（55人）」の3群に分けて比較した（図2-6）。「11年以上」の経験群では、「関連機関の説明や最新情報」に関する研修希望が最も多く、次に「指導方法や学習方法」に関するものが多かったが、「5年以下」と「6～10年」の経験群では、「基礎的研修」、「指導方法や学習方法」に関する研修希望が多かった。経験年数によらず、指導方法や学習方法に関するニーズが高かったが、経験年数が浅い教員にとっては、基礎的な内容に関するニーズも高い傾向が見られた。

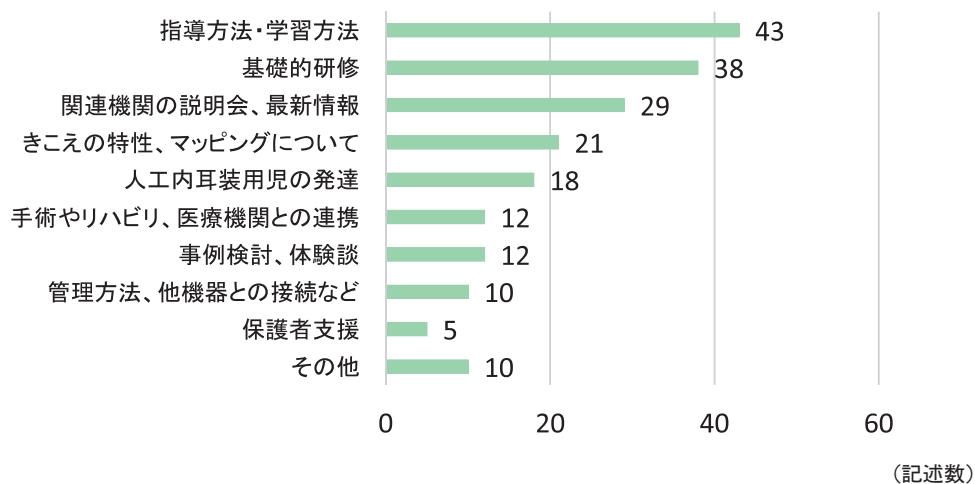


図2-5 学習したい研修内容

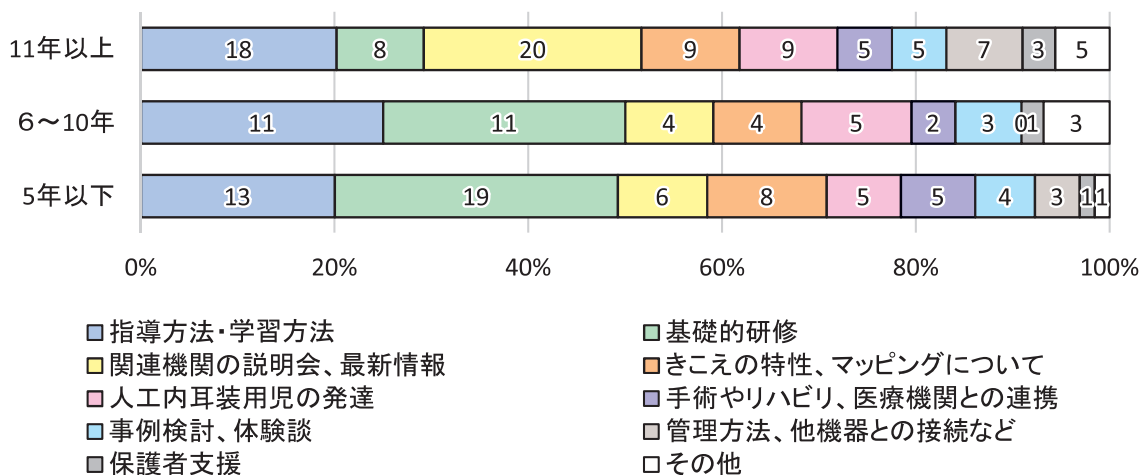


図2-6 学習したい研修内容（指導歴別）

2. 人工内耳装用幼児事例の概要

回答が得られた人工内耳装用幼児の事例数は、3歳児89、4歳児114、5歳児107の合計310事例であった。また、このうち重複障害は、3歳児15、4歳児17、5歳児14の46事例で全体の14.8%であった。聴覚障害以外の障害種は、図2-7の通りである。「知的障害」と「その他」の回答が多かった。「その他」の回答には、「発達障害」に関する記述が大半を占めた。また「軽度の知的障害」や「発達障害の疑い」等の記述も含まれていた。

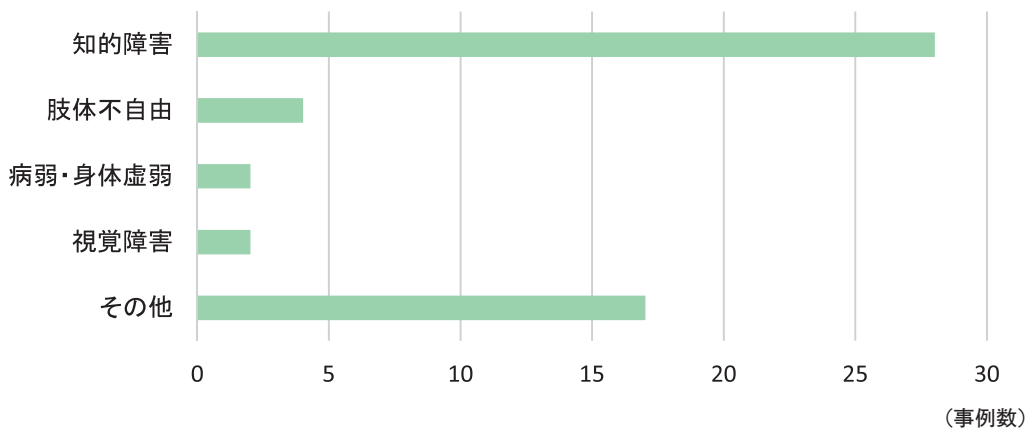


図2-7 聴覚障害以外の障害種

1) 聴覚障害診断時の年齢および人工内耳装用開始時期

重複障害の有無別にみた聴覚障害診断年齢を図2-8に、また、人工内耳装用開始時期を図2-9に示した。診断年齢では、重複障害の有無による顕著な差は見られず、全体として1歳未満での診断が約7割を占めており、2歳前には、8割強が診断されていた。人工内耳装用は、1歳台から2歳台で開始されており、「重複なし」と「重複あり」で顕著な差は見られなかった。

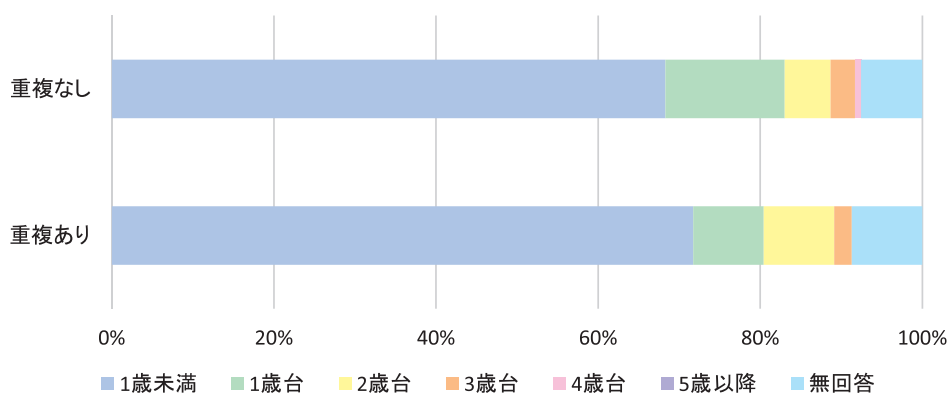


図2-8 聴覚障害診断の年齢

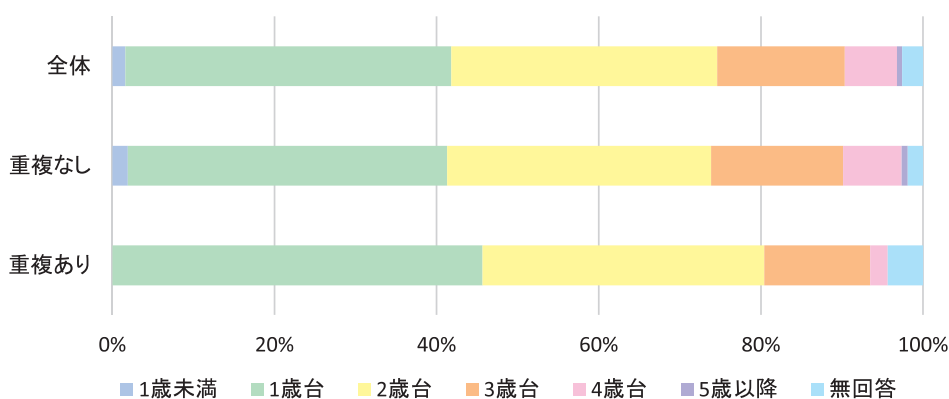


図2-9 人工内耳装用開始時期

2) 人工内耳装用状況

人工内耳装用状況および平均聴力レベルについての結果を表2-4、図2-10、図2-11に示す。人工内耳の両耳装用は、重複障害がない事例（以下、「重複なし」）で135、重複障害がある事例（以下、「重複あり」）で18となっており、「重複なし」で約5割、「重複あり」で約4割であっ

た。また、人工内耳の片耳装用の中で反対側に補聴器を装用している事例は、「重複なし」で115、「重複あり」で22となっており、重複障害でやや少ない傾向が見られたが、全体的に人工内耳や補聴器の両耳装用が行われていることが分かった。

補聴援助システムの利用状況は、幼稚部全体において「利用あり」が36%、「利用なし」が61%であった。重複障害の有無による違いはなく、全体の3分の1程度が使用していた。

表2-4 平均聴力レベル (dB HL)

聴覚障害児に対する指導状況	右耳 (Min-Max)	左耳 (Min-Max)
人工内耳 術前 (裸耳)	101.5 (35.0-133.0)	101.7 (35.0-133.0)
人工内耳/補聴器装用耳	38.0 (18.0-120.0)	39.9 (18.0-125.0)

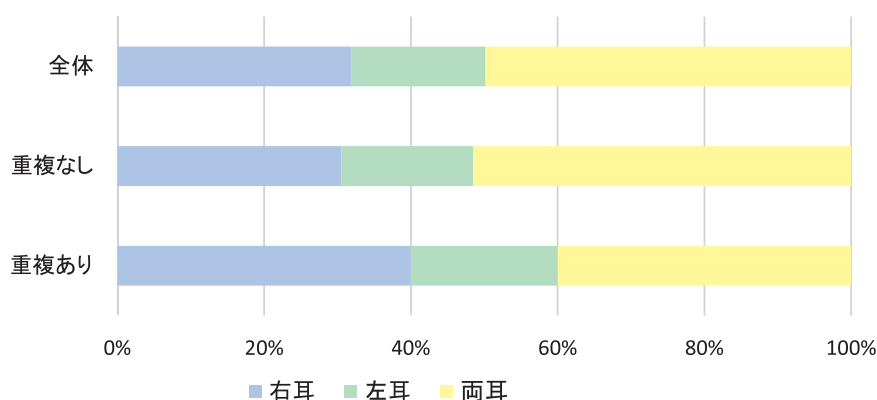


図2-10 人工内耳装用の状態

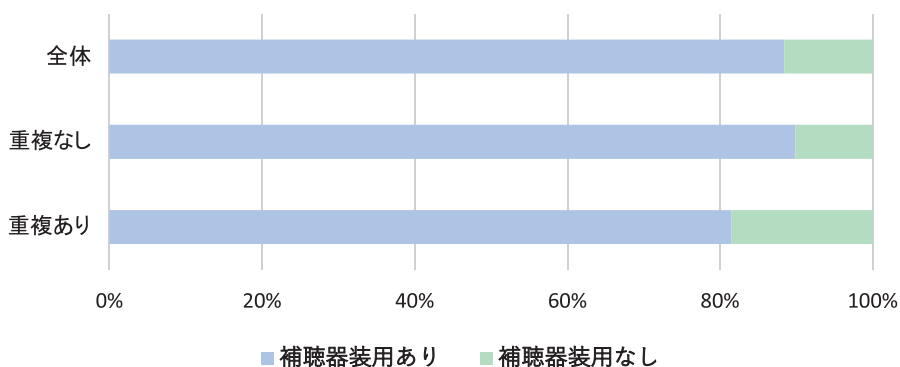


図2-11 片耳装用児における未装用側の補聴器装用の状態

3) コミュニケーション手段

普段使用しているコミュニケーション手段についての結果を図2-12に示した。音声と手話がともに8割を超えており、次いで指文字が約5割であった。「その他」の回答としては、身振り、指さし、絵カード、写真、発音サイン、文字などの視覚的手段の回答が多かった。また、学習場面で使用している手段としては、音声をあげる回答が多かったが、幼児の場合、普段使用しているコミュニケーション手段をベースに学習活動が展開されており、その上で音声を意図的に使用していることがうかがえた。

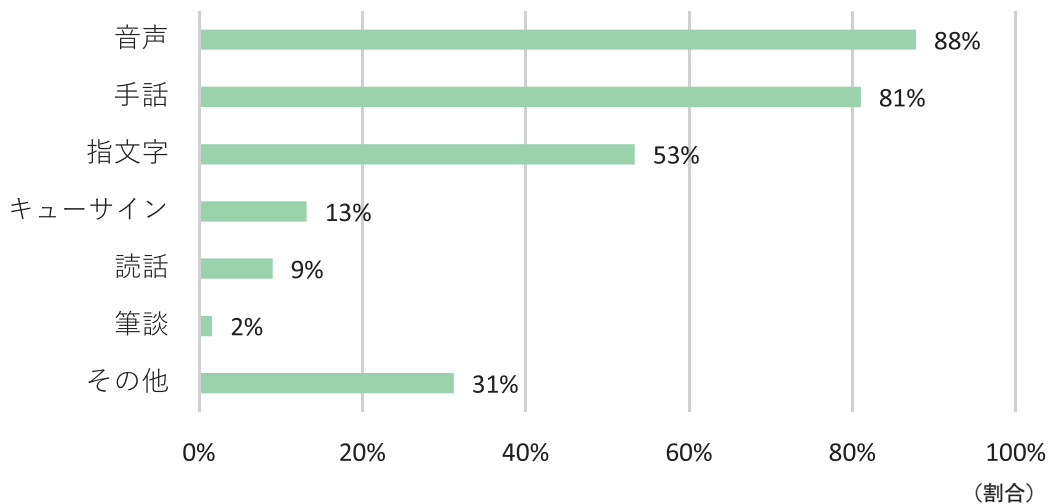


図2-12 普段使用しているコミュニケーション手段

4) 教育歴

乳児期の教育歴について図2-13に示した。特別支援学校（聴覚障害）における教育経験がある幼児が244事例となっており、多くの幼児が乳児期から特別支援学校（聴覚障害）に通っていたことが示された。また、全事例のうち76事例が複数の教育機関に通った経験があったが、このうち23事例は「重複あり」で、「重複あり」の5割が複数の機関での教育経験があった。その他の施設としては、「放課後デイサービス」、「STリハビリ」、「認定子ども園、保育所」、「児童発達支援センター（発達障害）」、「療育センター」があった。

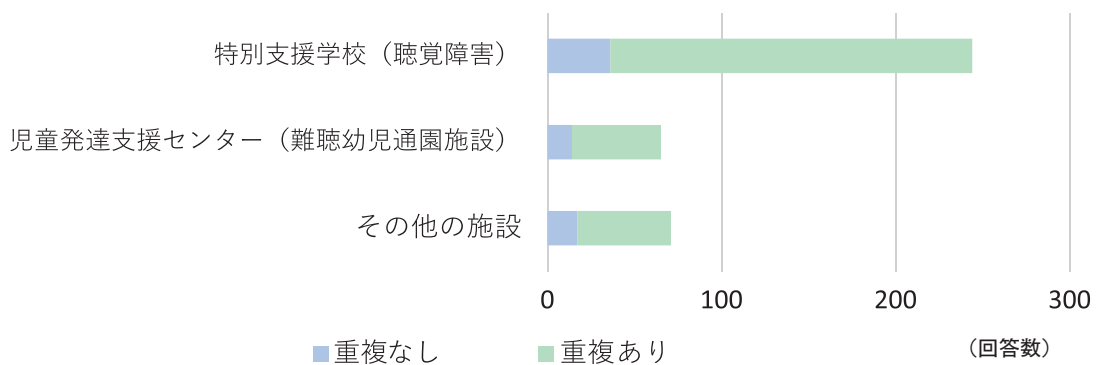


図2-13 人工内耳装用幼児の教育歴（乳児期）

5) 今後の進路希望

今後の進路希望について図2-14に示した。就学前の幼児が対象であったため、小学校段階における進路希望の回答が主であり、中学校段階以降の回答はほとんど見られなかった。小学校段階においては「特別支援学校（聴覚障害）小学部」への進学が6割程度であった。

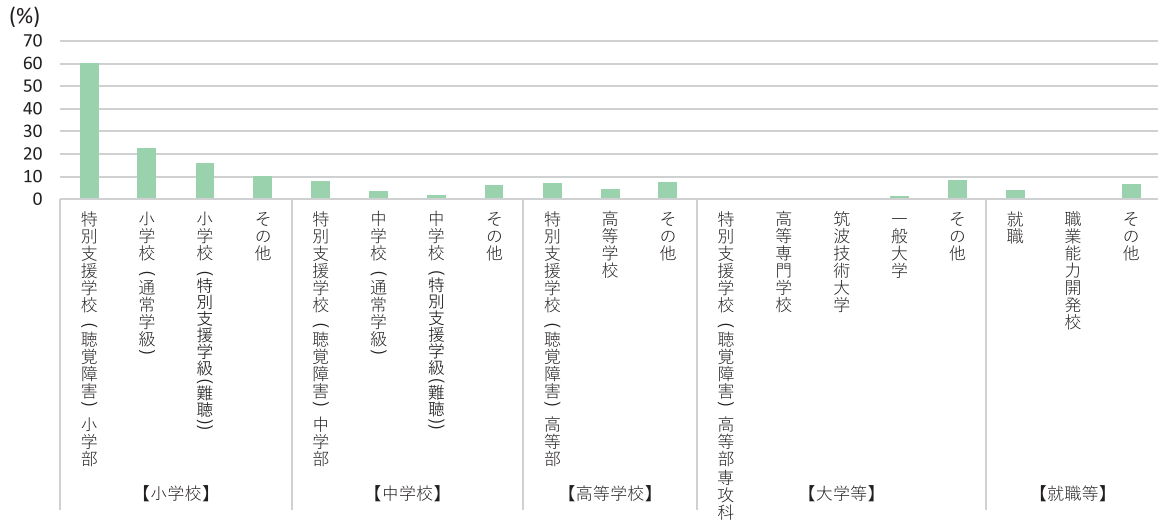


図2-14 今後の進路希望

3. 人工内耳装用幼児の聴覚活用の状態

1) 音への気付き、言語音の聴き取り、傾聴の姿勢・態度について

3つの観点からの聴覚活用の状態の結果を図2-15、図2-16に示した。音への気付きの観点での状態は、どの学年でも、「きわめて良い」「良い」が8割近くを占めていたが、「言語音の聞き取り」「傾聴の姿勢・態度」は4～5割となっていた。しかし、「言語音の聴き取り」「傾聴の姿勢・態度」は学年が上がるにつれて「きわめて良い」「良い」と評価されたものがやや増えている傾向も見られた。重複障害の有無での比較では、3つの観点とも重複障害がある場合とない場合で大きな違いが見られた。

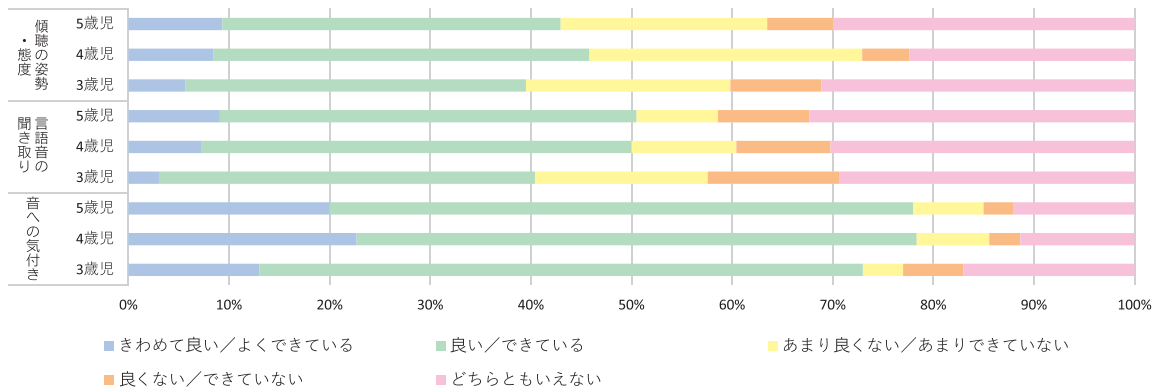


図2-15 聴覚活用の状態（学年別）

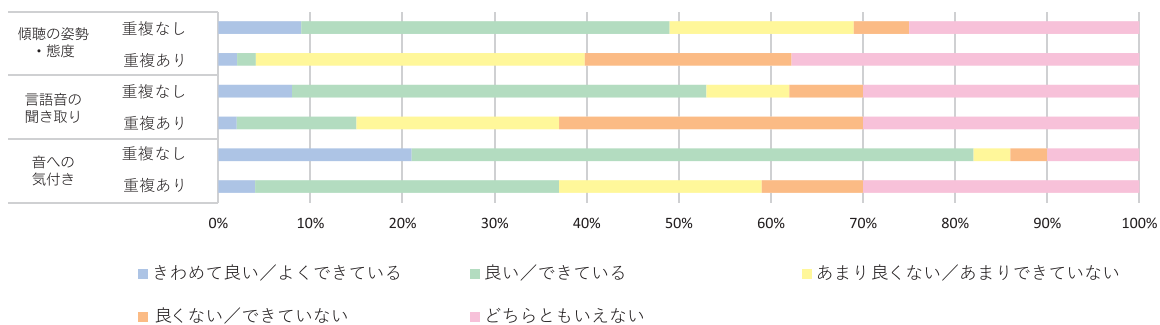


図2-16 聴覚活用の状態（重複障害の有無）

2) 聴覚活用に関する指導の現状と課題（記述回答）

記述内容は、大きく「言葉の発達へのつながり言語指導の側面」、「傾聴態度、聴覚活用への姿勢」、「音への気付き、聴覚の活用を促す指導」、「装用習慣に関する指導」、「聴覚活用以外の手段（視覚教材や手話、サインなど）を併用しながらの指導の展開」、「その他」、「無記入」に分類された。結果を図2-17に示した。

「重複なし」では、3歳児の段階から「言葉の発達へのつながり言語指導の側面」の記述が多かったのに対して、「重複あり」では、年齢段階が進むにつれて「言葉の発達へのつながり言語指導の側面」の記述が増える傾向が見られた。また、「傾聴態度、聴覚活用への姿勢」については、「重複なし」では多く見られたが、「重複あり」では記述が見られなかった。さらに、「聴覚活用以外の手段（視覚教材や手話、サインなど）を併用しながらの指導の展開」については、「重複なし」では4、5歳児の段階での記述が多かったのに対し、「重複あり」では3歳児で多くなっていた。なお、「その他」の記述は、「人工内耳の効果がまったく見られない」等の記述が複数あった。「重複あり」では、「他障害の問題が大きい」、「音への反応がよく分からない」といった記述も散見された。

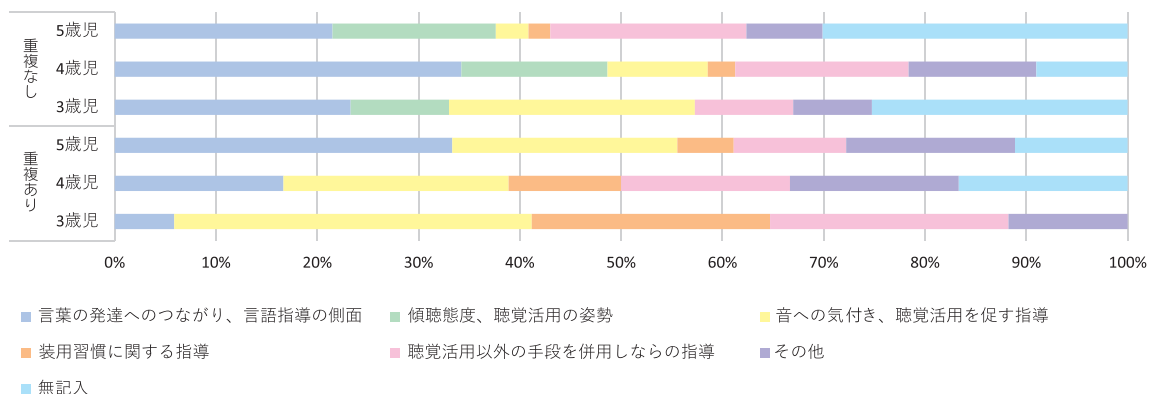


図2-17 聴覚活用の指導の現状と課題についての記述回答

4. 人工内耳装用幼児の言語活動の状態

1) 言語活動の状態

「文法力」、「文章理解力」、「書く力」、「作文力・文章構成力」についての結果を図2-18、図2-19に示した。全体的に「やや低い」「低い」という回答が80%以上を占めていた。同年齢の

健聴幼児と同等以上の力があると評価されている割合は、「文法力」と「文章理解力」で年齢が進むにつれて上昇していた。「書く力」と「作文力・文章構成力」については、重複障害の有無によらず無記入の回答が多かった。

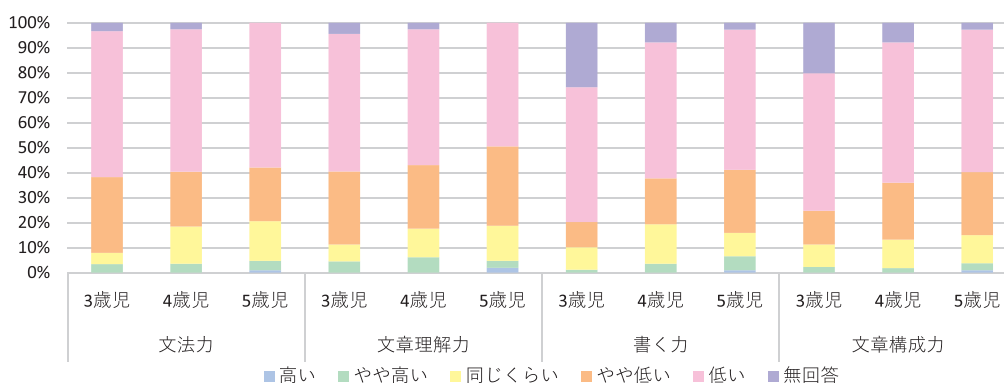


図2-18 同年齢の健聴幼児と比較した言語活動の状態

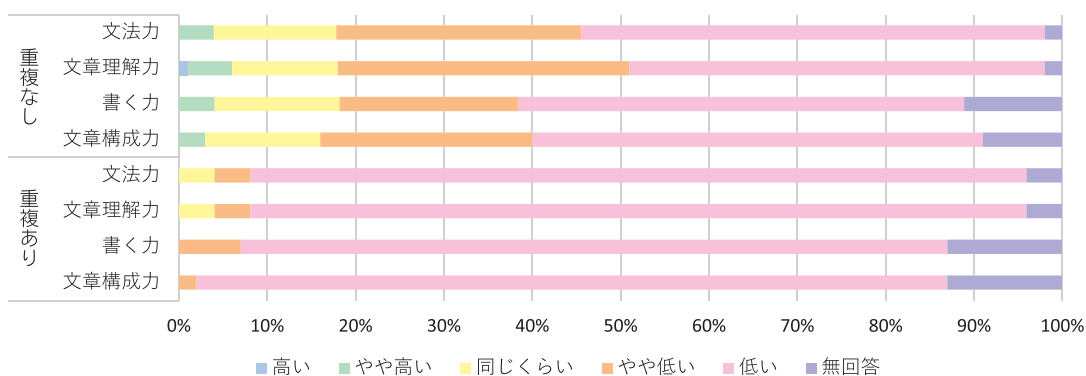


図2-19 言語活動の状態（重複障害の有無）

2) 言語活動に関する指導の現状と課題（記述回答）

自由記述の内容の分類結果を図2-20に示した。「語彙・言葉の概念形成」に関する記述がもっとも多く、次に「助詞の指導、文による表現力を高める指導」に関する記述が多かった。具体的な指導方法に関する記述については、ひらがな、口声模倣、絵日記、手話の併用、指文字やキューサインを含めた視覚的な手段の活用等があった。「その他・不明」には、「口頭による指導は行っていない」、「手話の獲得を目標にしている」、「不安を除去する」、「環境設定」、「思考力をつける」等の記述があった。全体的に事例児の言語発達についての記述が多く見られた。また、重複障害の事例や3歳児段階の事例において「ひらがなの指導」や「文字の読み書きの力」に関する記述も見られ、早期から文字を活用していくという指導が行われていることがうかがえた。

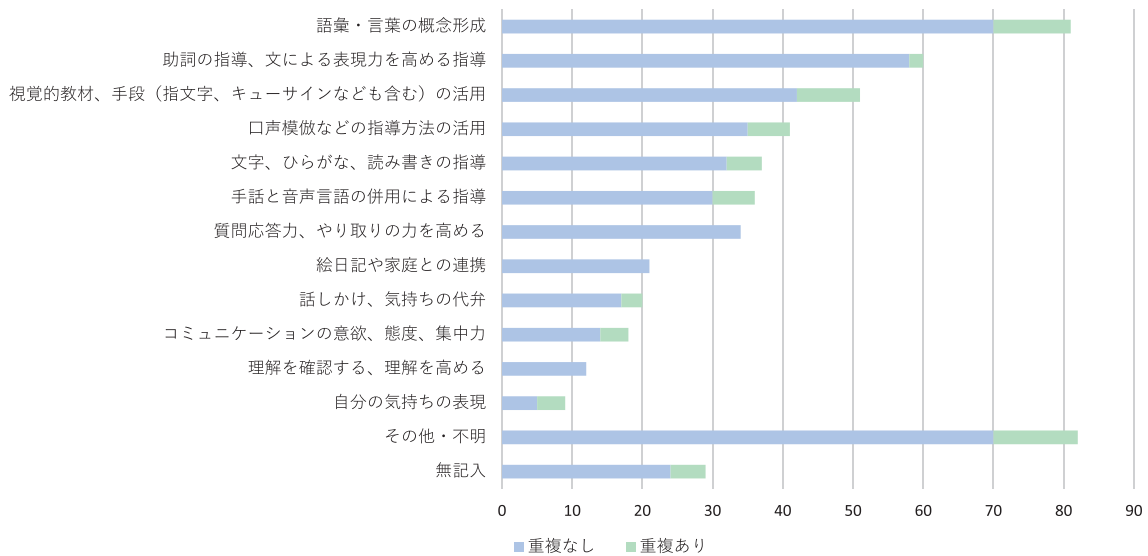


図2-20 言語活動の指導の現状と課題についての記述内容

5. 人工内耳装用幼児の学習と生活

1) 学習態度

「注意散漫の程度」「注意持続時間の程度」「口頭による指示に対する戸惑いや躊躇」について五件法での回答結果を図2-21、図2-22に示した。また、合計点数が8点以下の幼児についての指導上の現状と課題についての自由記述の回答内容の分類結果を図2-23に示した。「指導の工夫」を課題としてあげる記述が多く、内容としては「視覚的な教材の活用」、「環境の設定」、「丁寧な言葉かけ」、「興味関心に沿った活動の展開」といった記述が多く見られた。また「その他」では聴覚障害以外の問題がある記述が複数あった。全体的に重複障害の有無によって結果は大きく異なっていることが明らかであったが、記述の内容からは重複障害の内容のほか、教育歴等の背景によって指導上の課題が多岐にわたることがうかがえた。

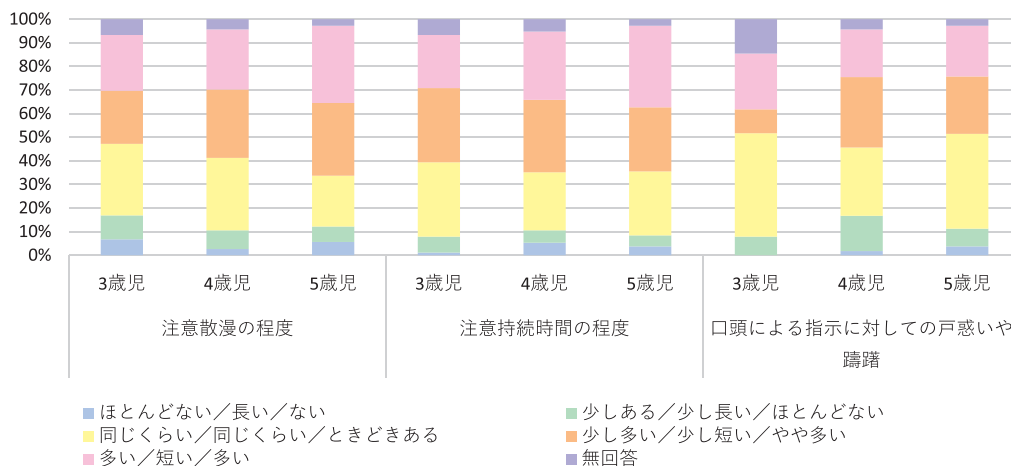


図2-21 同年齢の平均的な健聴の子供と比較した学習態度

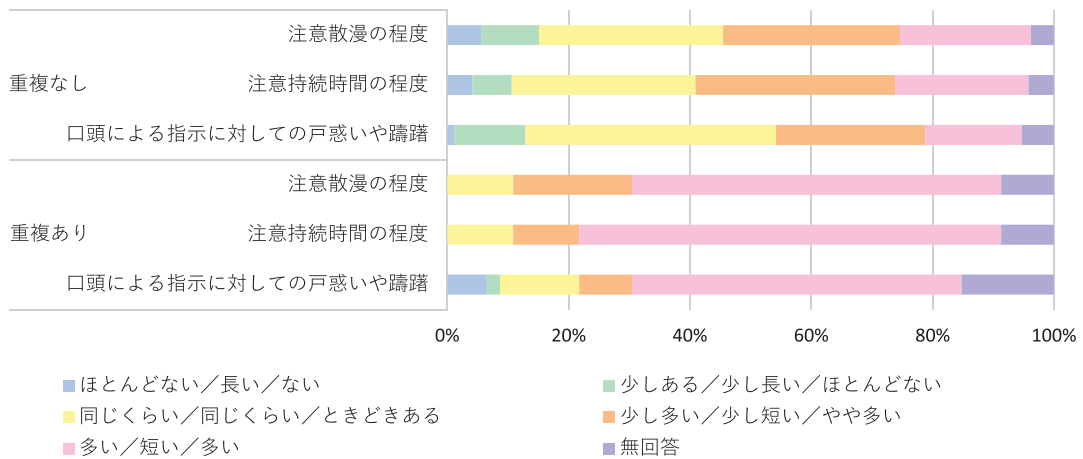


図2-22 同年齢の平均的な健聴の子供と比較した学習態度（重複障害の有無）

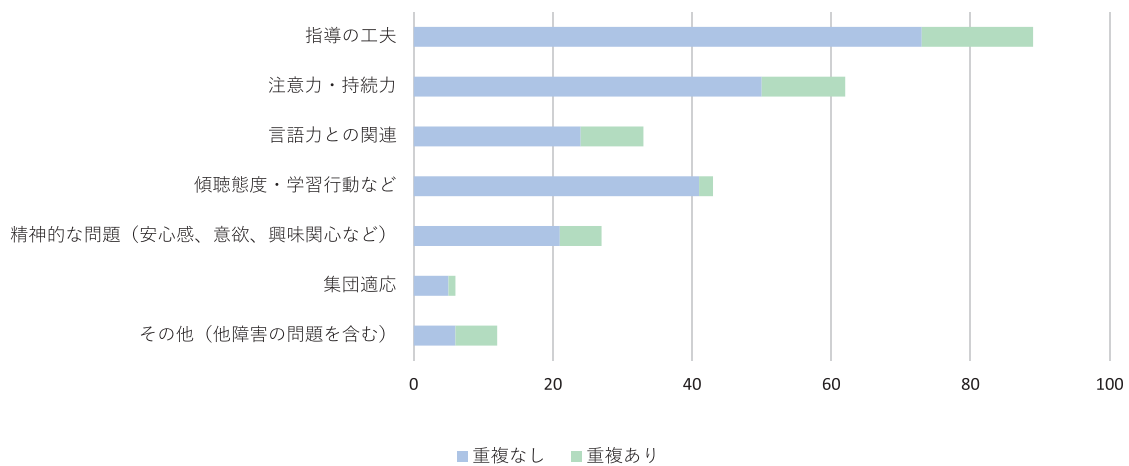


図2-23 学習態度に対する指導の現状と課題

2) コミュニケーション能力について

「コミュニケーション能力」「語彙力」「話す力」についての回答結果を図2-24、図2-25に、コミュニケーション指導における現状と課題に関する自由記述回答の結果を図2-26に示した。重複障害の有無においては、どの観点でも明確な違いがあったが、学年ごとのコミュニケーション能力の状態については、どの年齢段階においても、おしなべて「やや低い」「低い」という回答が多い傾向にあった。また、指導上の現状と課題については、全体的に、「語彙の不足」や「考えや経験の言語化」といった「言葉の力を高める」ことに関する記述がもっとも多かった。また、「重複なし」においては、「やりとり、質問応答力」に関する記述が多く見られ、「重複あり」では「手話など様々なコミュニケーション手段の活用」、「教師の仲介や声かけ、活動の工夫」に関する記述が多く、「非言語的なかかわりを重ねていく段階」といった具体的な記述も散見された。

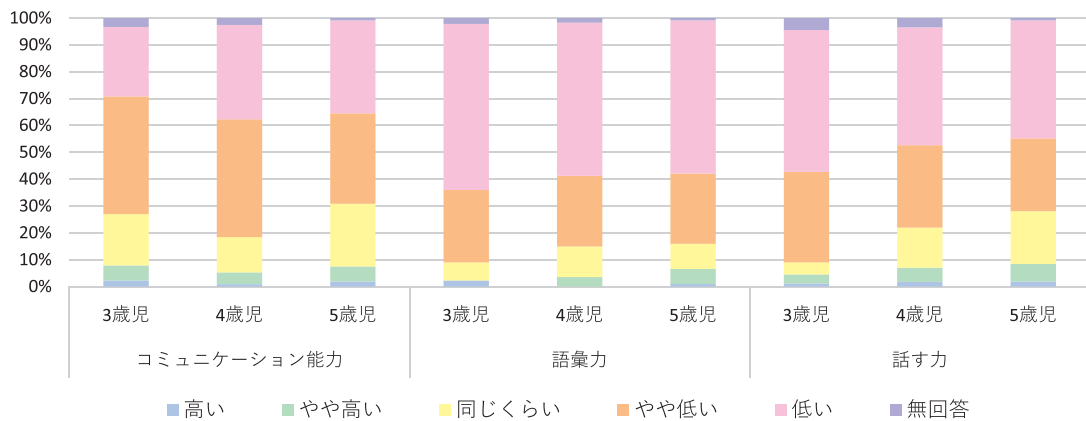


図2-24 同年齢の平均的な健聴の子供と比較したコミュニケーションの状態

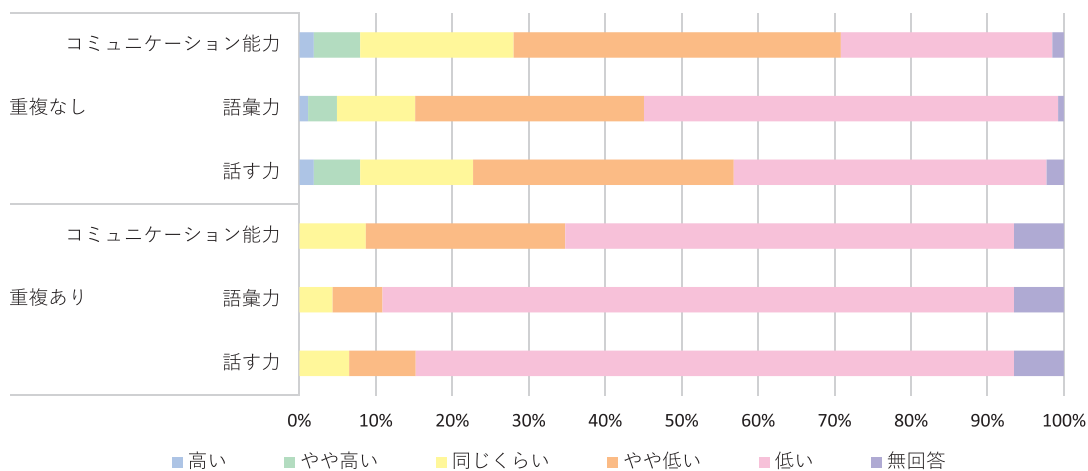


図2-25 同年齢の平均的な健聴の子供と比較したコミュニケーションの状態（重複障害の有無）

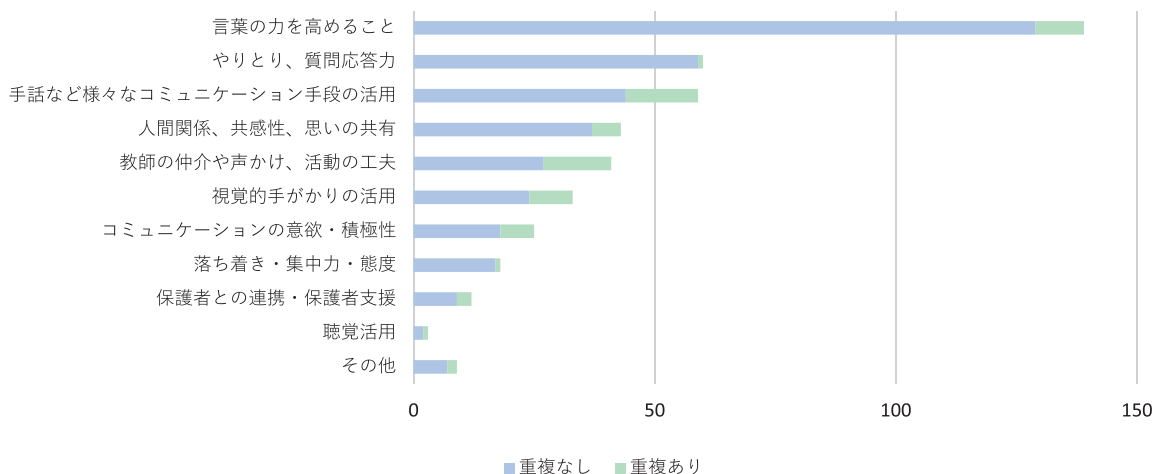


図2-26 コミュニケーション指導における現状と課題に関する記述

3) 学校生活について

学校生活については、「教師の質問、話し合いへの参加状況の程度」「持ち物の持参・宿題の提出」「指示後の課題の遂行の困難」での回答結果を図2-27、図2-28に、また、単純回答で合計8点以下の事例に求めた記述回答の結果を図2-29に示した。単純回答では、どの点も比較的

高い結果であった。記述回答では、環境設定や個別の配慮など「指導の工夫、個別の対応など」に関する記述が、重複障害の有無にかかわらず、もっとも多く見られた。次に「言葉・コミュニケーション」に関するものが多かったが、これは「重複なし」の事例での記述がほとんどだった。「保護者・家庭との連携・保護者支援」を課題に挙げる記述は、どちらの事例でも多く見られた。

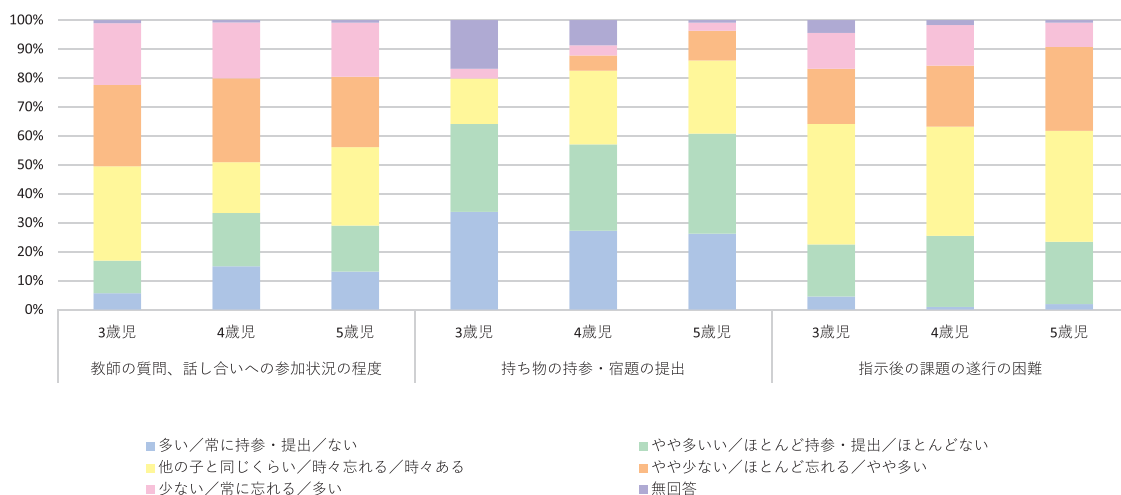


図2-27 学校生活について

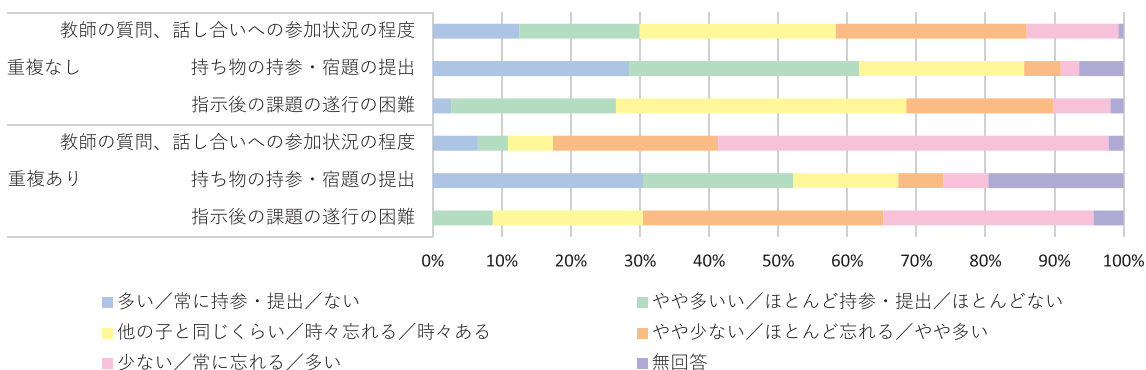


図2-28 学校生活について (重複障害の有無)

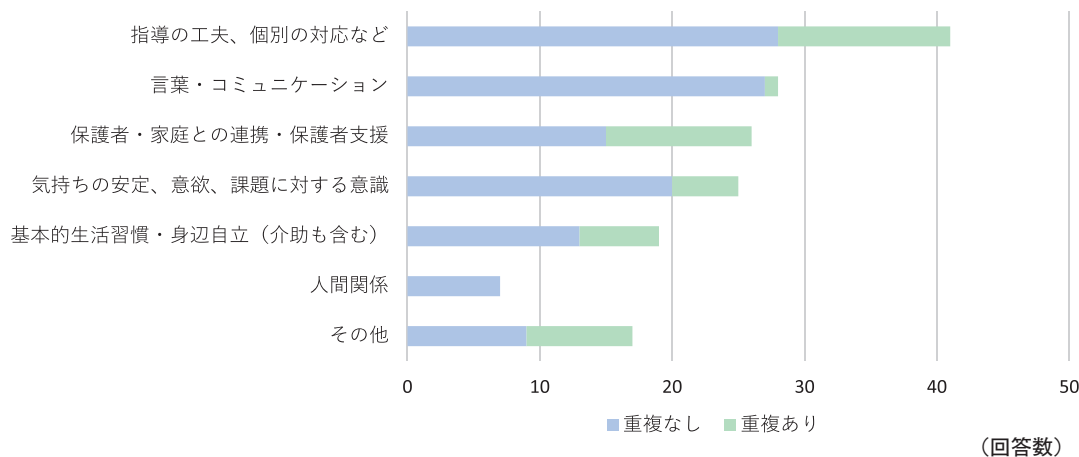


図2-29 学校生活の現状と課題に関する記述

4) 学校での行動について

学校での行動について、単純回答の結果を図2-30、図2-31に示した。「友人関係」の観点については、どの年齢段階においても「ふつう」あるいは「良好」「非常に良好」という回答が多く、とくに「重複なし」では9割を超えていた。「不適切な行動」や「落ち着き・ストレス」の観点では、「重複あり」でやや低い傾向が見られたが、重複障害のない事例も含めて個別の事例によって様々であることがうかがえた。単純回答の合計が9点以下の事例に対して求めた行動に対する指導の現状と課題についての記述の分類を図2-32に示した。記述された内容は多岐にわたっており、分類上の傾向は明らかではなかった。単純回答の結果と同様、個別の事例によって実態が様々であることがうかがえた。記述内容としては、「集団への適応に課題がある」、「周囲の状況を理解することが困難」、「気持ちの安定が重要」「活動に対する意欲を高めること」といったものが多かった。また、多動性や衝動性、こだわりといった発達障害の特性につながる傾向の記述も散見された。「重複あり」では、個別的な対応を課題としてあげる記述が多かった。

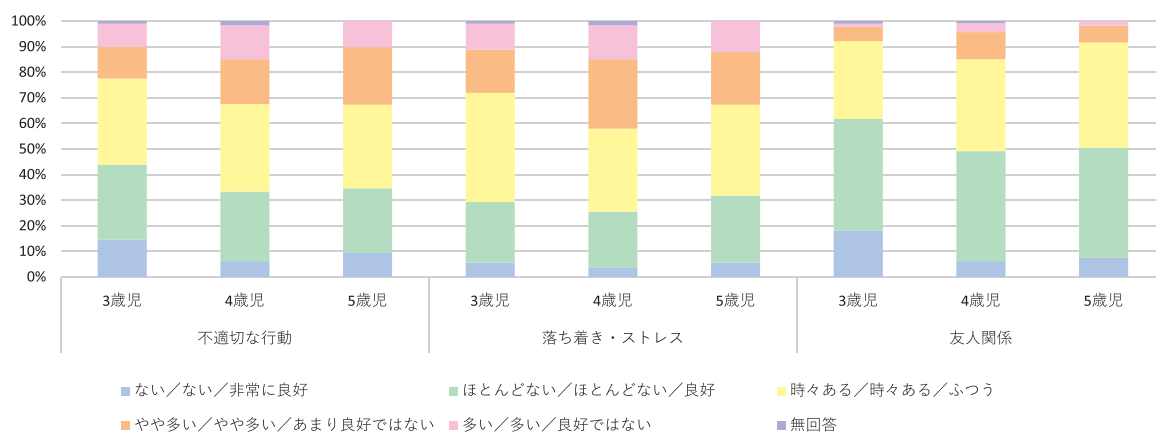


図2-30 学校での行動

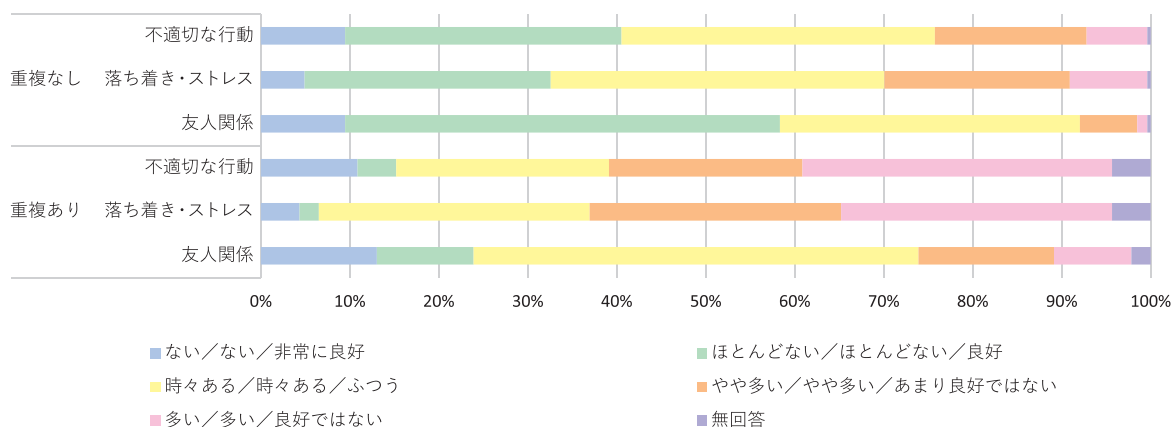


図2-31 学校での行動 (重複障害の有無)

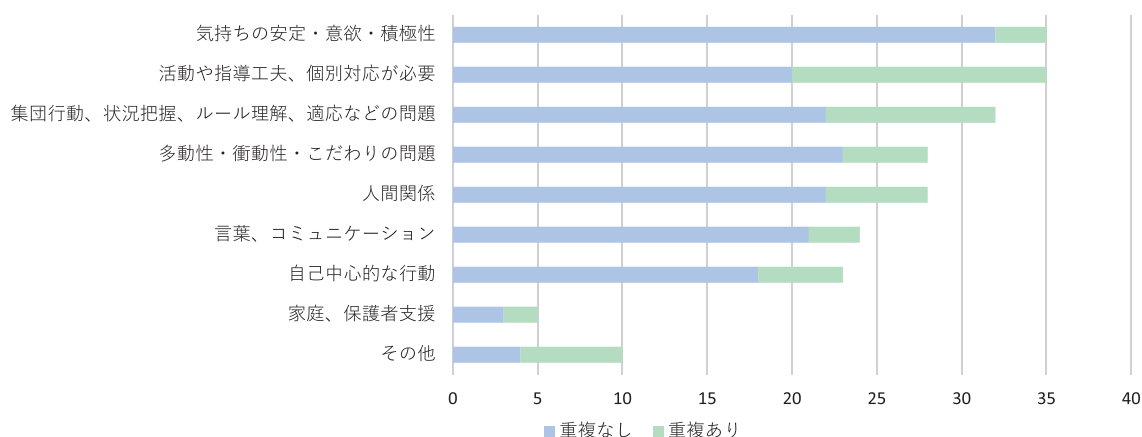


図2-32 学校での行動に対する指導の現状と課題（記述）

II まとめと今後の課題

1. まとめ

幼稚園で人工内耳装用幼児の指導を担当している教員は、比較的、特別支援教育の指導経験を持った教員が多いものの、聴覚障害児の指導経験については10年以下が多かった。

人工内耳装用幼児のコミュニケーション手段については、音声言語と手話が併用、または手話を補助的に使用しているという回答が多かった。

人工内耳の装用状態では、人工内耳の両耳装用も多いことが示された。また、幼稚園入学前の1歳台や2歳台ですでに人工内耳が適応されている事例も多いという実態も示された。

人工内耳に関する研修へのニーズについては、医療情報から具体的な指導法まで多岐にわたっていたが、経験年数が浅い教員は基礎的な内容の研修に対するニーズが高いなど経験年数によって異なる傾向が見られた。

医療との連携の内容と方法については、情報共有や情報交換を中心に、様々な方法で行われていたが、「連携できていない」「全ケースではない」「保護者を通して」といった記述も多く、さらなる連携の充実についての検討が必要なことが示唆された。

補聴器装用幼児との比較では、音や音声への気付きの状態等が良好である等の特徴が示されていたが、基本的には補聴器装用幼児と同じだという回答が多数見られた。とくに「話し手を見る」といった傾聴態度の問題、あるいは「言葉を聴いて模倣できても意味を取り違えている」という問題の指摘が多数見られたことは、重要な視点であり、人工内耳装用幼児の指導も個々の発達上の課題に即して丁寧な指導を展開することの必要性が示唆された。

また、コミュニケーションや言語活動については、語彙の拡充、概念形成、文表現の力の向上といった言語発達について課題のある傾向が見られ、個々の幼児に適した指導上の工夫に苦慮している状況も明らかとなった。同様に、学習と生活面についても、様々な課題が示されており、個々の実態に応じた指導が展開されていることがうかがえた。

今回の調査では、重複障害のある幼児の人工内耳装用事例も多く示されたが、装用状態や聴覚活用、言語活動等の評価では、重複障害の有無によって違いがあり、重複障害のある事例では装用習慣をつける段階から丁寧な指導が不可欠であることが示唆された。

2. 今後の課題

幼児という発達段階を考えると、とくに学習と生活面に関する内容については、全体的な実態が表れているかどうかは検討が必要である。例えば、3歳児段階は、定型発達においてもまだ前言語的なコミュニケーションも活発な段階にあるため、指示されたこと以外の行動、あるいは衝動的な行動を取るということは発達上当然見られる特徴であるとも言え、離席行動などは場面によっては幼児の表現行動として肯定的にとらえる視点が不可欠となる。

本調査では、多くの事例が対象として挙げられ、発達上の課題は個別の実態によって差が大きいことも示唆された。今後、事例検討や授業研究等を含め、様々な視点からの人工内耳装用幼児の実態や指導上の課題等が明らかにされる必要がある。